

1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。2 この言は、初めに神と共にあった。3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。6 神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。7 彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。9 その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。11 言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。12 しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。13 この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

クリスマスおめでとうございます。神の御子イエス・キリストのお誕生を共に心からお祝いしたいと思えます。クリスマスは御子イエス・キリストの誕生をお祝いするわけですが、とりわけ今日の聖書の言葉ではこの世界に「光」が訪れたことを喜び表しています。御子イエスさまは、この世を照らすまことの光として、父なる神のところから遣わされました。そして、ここでこれがとても大切なところだと思うのですが、その光はとりわけどこで輝いているのか、というところですね。真実を照らし出す御子の光は、特に暗闇の中で輝いているのだということです。ここが、本当にとっても重要なことだと考えられます。それはなぜかと言いますと、暗闇というのはいつの時代にも、どんな場所でも存在するからです。イエスさまがお生まれになった時だけでなく、今の私たちの時代にも、暗い闇の世界はあちらこちらに存在しています。そんな暗闇を照らし続けるために、神さまは大切な独り子であられるイエスさまを、私たちのところに送っていただきました。

そして、その暗い闇の世界は、私たち自身の中にもあると思えます。うれしくて、楽しいと思える時ばかりでなく、気分が落ち込んでしまい真っ黒な闇夜の中をさまようような時もあると思えます。誰かを恐れったり憎んだり、未来に絶望したり、とても人には言えないようなそんな暗闇に心が閉ざされてしまうこともあるでしょう。そのような私たちの暗闇の中にも、御子イエスさまは神の言葉を携えてちゃんとお生まれになってくださいます。闇が深く真っ暗であるほどに、キリストが照らしてくださる光は暖かく私たちの冷え切った心を温めてくださいます。キリストの光は私たちの置かれている状況が悪ければ悪いほど、その灯火の光をいくつもいくつも灯してくださいます。

ただですね。このキリストの光というのは、神さまからもたらされた光であるということは、誰が見てもすぐにそれだとわかるような光ではありません。電気をつけて明るくなったという光は、誰でもすぐに気がつきます。しかし、御子の光は色や形もなく、私たちはすぐに気がつくことができない種類の光なのです。ここでは、御子イエス・キリストがもたらす光は、神の栄光を輝かす光なのだといえます。ですので、この神の栄光というところのない光は、なかなかすぐに気づいてもらえないということが起こるのでですね。

5節のところにこうあります。「暗闇は光を理解できなかった」とあります。あまりにも、人々を取り囲む闇が濃かったら、なかなかキリストの光は見えきません。そして9節にはこうあります。「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである」と言われています。つまり、それとは気がつかなくとも、実は、キリストの光はすべての人を照らしているのです。しかし、そのことに気がついている人というのは、あまりいないわけで

す。10, 11節では、世は神の言葉を認めること、受け入れることが出来なかったと言っています。それだけです、人の目にはこの神の栄光という光は認識しがたいものです。

そこです。すぐにそれとはわかりませんので、聖書の言葉は宣教、伝道という手段を用います。宣教というのは、愚かな手段なのだと言っています（I コリント 1 章 21 節）。しかし、それしか方法がありません。大変地味で、パッと光る華々しい活躍はのぞめず、小さな灯火を灯し続けるという光らせ方だということです。

そこで、神の栄光の光というのはいったいどういう光なのか、聖書を通してここで確認したいと思います。光を知るには、その反対の闇を知ることで、その輪郭がハッキリしてくるでしょう。人間にとっての暗闇とは何か。旧約、新約聖書を通して、一つの共通した見解があると考えられます。私なりにそれをまとめてみまして、ここで4つ挙げたいと思います。

一つは戦争状態にあることが挙げられています。このことは戦争を経験された方々は、よくわかることでしょう。戦争ほど人を暗黒の世界に引きずり込むことはないでしょう。そして、戦争という大きな混乱でなくとも、何かしらの争いの状態にあることも私たちを暗闇の中に閉じ込めてしまいます。冷戦も含めて、人との交流やつながりを絶っている状態。この状態は、本人だけでなく、周りも苦しいですね。

二つめは、暴力が挙げられます。これも、殴ったり蹴ったりする直接的な暴力だけではありません。圧力や過度な緊張状態に置くこと。不利な立場の人々に、無理強いすることなども含まれます。最近ではパワーハラスメントとかセクシャルハラスメントなどと言ったりします。力の強いものが弱いものを精神的にも状況的にも強引に支配することです。

三つめは、不正ということが挙げられます。法律や規則を破り、自分や一部の人のみを特別扱いすることです。公平さを破り、機会の均等を損なうこと。つまり、誰かだけをえこひいきをするということです。このことには、人の目から隠れて、人々をだましたりごまかしたりすることが含まれています。

四つめは、搾取することです。他の人を犠牲にし、その犠牲の上に自分の利益を不当に得ることです。人間をもののように扱い、使えなくなったらゴミのように捨ててしまうこと。多くの人の利益を守るために、少数の人々を犠牲にするあり方のことです。

この四つのことを人間の暗闇として具体的に挙げる事が出来ます。これらのことが、家族や職場、学校や地域社会等々にそれぞれあてはめられて、闇の濃淡が決まってきます。

では、肝心の光の方ですが、実は、この四つのことをもししていなかったとしたのなら、そこにはすでにキリストの光が照らされているのです。こういうことをしないように気をつけようと少しでも努力しているだけでも、それは、キリストが私たちの心の中に宿っていることの証拠であり、しるしなのです。実は、ちゃんと神の栄光を現しているのです。このことはなかなか人から気づいてもらえないし、自分でもこんなことぐらい当たり前だと、ちゃんとやっている人ほど無意識に行っています。ですから、自分たちが「世の光」（マタイ 5 章 14 節）であることを忘れてしまうということが起こるのです。

しかし、実は当たり前ではないのです。よくよく注意してそうでないところと比べてみますと、このことは非常にまれなことなのだということが分かります。暗闇の業をやる人の方が強いし、この世においては力を持ちます。そんな劣勢の中、それに与しないで中立を保つことだけでも大変なこと。これらの暗闇の業に荷担しないだけでも、キリストが私たちの中に誕生していなければ、決して出来ることではないのです。

そのようなとてもまれなことをしている人々や場所がどこかにないか、思い浮かぶところはないでしょうか。私は、これは手前味噌なのですが、萩教会が挙げられると思います。争い、力の支配、不正、搾取といったこの四つの暗闇が、どうでしょうか、ないのではないのでしょうか。私もこのことがあまりにも当然のことのようにな

っていましたので、私たちが神の栄光の光を輝かせているということは意識していませんでした。改めて、クリスマスの聖書の箇所を追って行く内に、イエス・キリストの光がどのようなものかを考えている時に、ハッと気がついたのです。ああ、一番大切なことをちゃんとやってるのではないかと。実は、このことは本当にまれなことなのです。思い返せば、私もたくさん教会を今まで見て来ました。何かしらどこかが偏っているのです。特に上下関係という力の支配がない教会というのは、どうでしょう、ありえるのでしょうか。本当に希少価値のあることなのだと思います。

今、私たちが、この神の栄光の光を浴びていることを、私たちは心から喜んで良いのだと思います。安全で、キリストの暖かな光が私たちに差し込んでいることを、素直に喜びたいと改めて今回気がつかされました。この世界の中で、キリストの光を拒絶した暗闇の中を生きざるを得ない人々が本当に多く存在しています。まず、キリストの教会が、そのような暗闇の場所で傷つき、苦しめられている人々の避難場所でありたいです。家庭で、職場で、学校で、社会の中で、たくさんの人々が苦痛の思いであえいでいます。もちろん、これらの場所にも、神の栄光の光、キリストの平和の光をもたらしたいです。弱い立場の人が、その中でキリストの光に守られながら耐え抜くというのは限界があります。どうしても強い立場の人が回心して、暗闇の業をやめる必要があるのです。その日が、主の日が来るまで、教会は回復の場として、憩いの青草の原として、暖かく立ち続けて行きたいです。御子の光は、私たちに勇気と希望を灯してくださいます。この神の栄光の光を、消すことをしないで灯し続けて行くということがとても大切です。一気呵成に、相手を倒してしまうというではありませんが、負けない戦い方、一見弱々しく思えても、誰もが参加できる持続可能な暗闇との戦い方をして行ければ良いと思います。

まことの光をもたらした父なる神。

この暗闇の世界に人として、肉なる者として来られた子なる神。

暖かな啓示の光を世界に吹き込んでくださる霊なる神。

聖書が示す神さまのこの世界への救いの業を、このクリスマスの時に共に感謝し、喜びの賛美を共に歌いましょう。